

米作りの会社
「なめがたガキンチョ米会社」
経営の試み

優秀賞

茨城県・神栖市立横瀬小学校

山本 良信

茨城県・行方市立行方小学校

宮崎 幹子

1 はじめに

人間は社会的動物で、社会との関わりを持って育つと言われながら、現在、子供の置かれている状況は望まれる状態にはほど遠く、その状況が要因となり、好ましくない多くの問題が発生している。かつてはウサギを飼い、売って得た金を自分で使う、子供が金銭を稼ぎ、人との関わりを持って成長していった時期があった。その過程で、生きた知識を身につけていったように思える。現在、労働と金銭のつながりを体験する場はなくなり、意図的に場の設定をしなければならぬ状況になってしまった。材料として米を取り上げ、金銭を軸に社会と積極的に関わる場を設定し、金銭感覚を培おうとして本実践を計画した。与えられた環境と様々な条件の中で、子供が自ら考え、判断し、行動することを期待しての実践である。

2 目標

- (1) 米作りの会社を設立し、商品を作り、販売、利益を得、活用する体験を通して、経済活動の一端を学ぶと同時に金銭感覚を醸成する。
- (2) 活動を進める過程で多くの人達と関わりを持ち、地域社会の一員として、地域の間人関係を理解し、深める。
- (3) 米を生産することで、稲の生育や動植物、水、環境についての知識を得る。

3 実践を進めるに当たって

本校は農業地域にあり、畑作、稲作が盛んである。子供達の家庭の9割は何らかの形で農業に関わっている。しかし、機械化された農業が子供の手伝いを必要としていないためか、子供達の農業に関する知識や体験は少なく、米作り地帯にありながら米や野菜について、学校で教えなければ分からないという状況である。

3年前より、5年生の総合的な学習の時間に米作りを取り入れてきた。会社を設立し、田んぼを借り、耕す段階から関わり、収穫し、販売する体験をさせてきた。その過程で、現金を取り扱いながら多くの人と関わりを持つ場を設けた。その都度、「自ら考え判断し、行動」しなければならぬ状況が設定されることで、子供は真剣に取り組むことが出来た。判断し行動した結果は状況の変化としてすぐに子供にフィードバックされ、次の行動につながっていった。本レポートは子供の大きな変容を願った、第5学年7名（男3、女4）の総合的な学習の時間の実践である（平成19年度）。

4 実践 「なめがたガキンチョ米会社」の経営

実践は多岐に渡り広い内容を含んでいる。ここには、要点を列記する（指導計画〈資料1〉及び写真〈資料2〉参照）。

- (1) 会社の設立
 - ・ 農家は何のために米を作っているの？
 - ・ 子供達に米の生産販売を目的とした会社設立を提案する
 - ・ 会社の組織作り：社長（1）、米作り部長（1）、会計部長（1）、宣伝部長（1）、一般社員（3）
- (2) 会社の運営開始
 - ・ 借地：約15アール、揚水はポンプで（電気料支払い）、草刈り（教師）
 - ・ 耕作（起耕）の依頼：協力農家
 - ・ 作付け品種と面積を決める：コシヒカリとマンゲツモチを栽培

- ・種まき：芽出し、プール式苗代作り、種まき、育苗
 - この時期になり、米作りについての見通しがはっきりしてくる。何回も会議を開き、スケジュールを確認しながら、社長や部長から、指示が出るようになる。作業内容を調べ、時間割を考慮し、担任の先生と日程を調整していく。
- ・代掻き（5月上旬）：灌水、耕耘機2台で子供の手で実施
- ・田植え（5月中旬）：田植機を使って田植え、差し苗
- ・水管理：水の状態の確認、不足時にはポンプで揚水
- ・アイガモ除草：アイガモ農家の協力で教えを受けながら実施、外部講師依頼、アイガモネット張り、アイガモの取得、飼育、刷り込み、水に慣らす
- ・中干し：分けつ状況の観察、水抜き、受粉
- ・ゆっつお（稲束を結わえる）作り：地域の方に教えてもらい1,500本作成
- ・アイガモネットの取り外し
- ・稲刈り：コシヒカリをコンバイン、マンゲツモチを手刈り
- ・乾燥・粳すり・精米：協力農家に依頼

(3) 販売

- ・場所・時間の確保、市場調査、経費を考慮、販売価格の決定、準備、リハーサル、売り出し、なめがたあきんど祭に出店（2日間）

(4) 収支決算

○経費合計	29,580円	○売り上げ	合計 185,000円
種粳代	4,200円	コシヒカリ	119,400円
培養土	1,900円	マンゲツモチ	60,000円
ビニル袋	630円	サツマイモ	5,600円
燃料代	2,500円		
アイガモ（含む送料）	9,000円		
アイガモネット謝礼	2,000円		
テグス（鳥よけ）	600円		
米袋代（5kg、10kg）	3,870円		
電気料金（4月～8月）	4,880円		
○資材の利用			
耕耘、脱穀、乾燥、粳すり、精米	補助金で謝礼		
耕耘機、田植機、コンバイン	経費は燃料のみ		
材木、ビニルシート	学校の物を使用する		
鎌	個人		
育苗箱	借用		
○収益	155,420円		

(5) 収益金の使途

- ・土地代、謝礼は現物で支払い（外部講師をお願いした方）
- ・売り上げの使途：諸費用（電気代、謝礼等）、給料支払い、学校にプレゼント、各学年にプレゼント、宿泊学習費用の一部に充当

(6) 取材

- ・茨城新聞 5月1日付（資料3） 行方小 児童が本格農業体験 稲作りから販売まで
- ・朝日新聞 6月29日付（資料4） 学び最前線 行方市立行方小学校 「社員」務め農業経営体験
- ・農業委員会だより 第5号（資料5） 行方小学校で本格農業体験
- ・農業いばらき 6月号（資料6） つながる広がる食農教育 小学生が作る会社

5 成果

田んぼに足を入れるのさえ躊躇していた子供が、表面の温かい泥に心地よさを覚え、稲の葉で傷を作りながら額に汗して草を取り、腰を屈めて稲を刈る。苦労を重ねた末の収穫の喜びは大きく、その分だけ子供達はたくましく変容していった。本物の米作りをしているという実感があったようだ。金銭に関しては常に儉約的であった。話し合いの中で費用のかからない方法を常に考えていた。昨年度、自動精米機（10kg 当たり 100 円かかる）を利用したが、今年度は自分達の家にあった精米機を探し出し、提供してもらい少しのお礼だけで済ませる等、出費を抑えようと努力する姿がいろいろな場面で見られた。浪費に対しては厳しかった。自然と公金を扱うという態度が育っていった。現金を直接扱ったこと、労働と金銭が結びついたことがこのような態度につながっていったように思える。また、商品を作るとき、売るときに間違いのないように常に心がけ、信用を失わないような行動を心がけていた。

- (1) 会社としての経済活動（資本、生産、販売、収支決算）の一端を体験的に学ぶことができた。労働と収益がつながり、会社から支給された給料は使わずに保管しているようだ。労働を裏付けに身につけた金銭感覚は確かなものである。
- (2) 家族、近所の方（差し入れ、応援）、援助してくれた農家（耕起、コンバインの提供、乾燥、籾すり、アイガモ農法、精米）、ゆっつお作りの講師、米購入者、商工会、展示店、新聞社、JA の方等、たくさんの人と関わりを持った。交渉したり、要望したり、現金の手渡しがあったり、と一人前に扱ってもらう場面を多く作ることができ、「家族や教師以外の大人」と関わり合うことができた。「米を作り売る」という取り組みを通して、多くの人達の姿を見、農業経営や流通に触れ、そこで働く人と関わることもできた。子供達は人の温かみを感じていた。子供達の世界が広まったようである。
- (3) 種まきから刈り取りまですべての過程を行った。稲の生育、雑草、田んぼの中の小動物の様子、害虫、小さな食物連鎖など多くの生物と生態を観察することができた。水、田んぼの役割など体験を伴った知識として蓄積できた。化学肥料、農薬についても学ぶことができた。

6 おわりに

金銭の周りには常に人がいた。子供はどんな環境（教育）に置かれるかで、その変容が異なる。本実践で子供の視野が広くなり、たくましくなった姿を目に見ることができた。見知らぬ大人に声を掛け、話をし、米を買ってもらったこと、汗を流して本物の米作りをしたこと、それを大人から評価してもらったことが大きく子供を変えたように思える。社会の中に身を置き、自然と接し、人と関わりを持つことが重要だが、こうした中で今後も学校が企画、運営の当事者として最重要視されていることがやや残念である。地域社会の中でしっかり根付いていくことが望まれる。

(資料1) 農業経営「なめがたガキンチョ米会社」指導計画

1 目的

- (1) 米作りの会社を設立し、商品を販売、利益を得、活用する体験を通して、経済活動の仕組みの一端を学ぶ。
- (2) 活動を進める過程で多くの人達と関わりを持ち、地域社会の一員としての人間関係を理解し、深める。
- (3) 米を生産することで、稲の生育や動植物、水、環境についての知識を得る。

2 準備・資料 農業関係資料

3 展開

時間	児童の活動・内容	教師の支援・指導上の留意点
4月	取り組みの概要を知る ○組織作り(会社) ・役割分担 社長、米作り部長、会計部長、 宣伝部長 ・会社名を制定 ○借地 ○耕耘の依頼(田畑) ○米作り一種の確保 ○米作り一種もみを浸す作業 保温・芽だし作業 ○米作り一種まき ビニル苗代作り もみの計量 土入れ、水まき、播種、覆土 苗代に並べる 水管理	<ul style="list-style-type: none"> ・自分達で、土地を借り、種を確保し、育て、収穫、販売して、収支決算を行い、収益については自分達の判断で活用する。 ・組織が事業を行い、収益を出すことを目的としていることを理解させ、誰もが初めての経験であることから、意欲ある児童を話し合いの結果で役職に選出する。 ・以後、児童の担当者の指示で動くようにしていく(当初は教師の助言が多くなるが)。 ・田んぼ(約15アール)、畑(5アール)を借り、借地を利用し、米、サツマイモの栽培を行う。 ・指導して下さる方に耕耘と指導をお願いする。 ・会計担当が経費、作業内容を記録するよう指導する。 ・農協、農家より、マンゲツモチ4kg、コシヒカリ4kgの種を購入(担任立替ー収益より支出)。 ・全ての作業は、担当者の指示により進行する。担当者には予備知識として、作業内容、注意事項を話す。具体的な作業工程については、社長を交え、担当者で考え、作業を進めるようにする。 ・説明の際の話し方について、話法技術を教える。話者が終わるまでは手助けを避ける。 ・発芽をさせる機械を導入し、種もみを機械に入れ、水温を設定し、芽出しの作業を始める。 ・育苗箱の確保 社長宅(農家)に依頼。 ・ビニルを用いた苗代を作る。工具を使う技術、作業技術を学び、体験する。 ・作付け面積、機械を使った田植えを考慮しながら、育苗箱に種をまく。 ・作業工程 苗代作り(角材を組み、ビニルを敷く) 土入れ、水まき、播種、覆土 苗代に並べる。 水管理をする。 ・毎日、水の状態を管理し、灌水する。 ・耕耘機を操作し、植え付けが出来るようにする。 ・担当者の指示で日程、方法を確認する。段取り、指示は担当者からのみ出るようにする(米作り部長)。 ・田植機の操作を説明し、児童だけで動かせるようにする。
5月	○米作りー育苗、水管理 ○米作りー代かき ○米作りー田植え ・苗を運ぶ ・田植機を移動する ・田植機を使う ・手で植える ・片付け ○米作りー水管理 ・水の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・ポンプの仕組み、ポンプの使い方を教える。 ・水流れと水を流す方法、水路の作り方を教える。 高位より低位へ、水路の傾斜、水量管理の方法について教える。 ・モグラ穴による漏水を発見させ、止めさせる。 ・以後、毎日、担当者が水の様子を観察し、必要なときには揚水し、水量を確保する。 ・アイガモ除草を提案 担当者で連絡を取り、手配する。費用は担任の立て替え。会計係が送金(郵便局)。 ・(アイガモだけでは除草が十分でない) 除草を米作り部長が中心になって計画させる。除草の必要性、雑草の種類、除草の方法を調べさせる。 インターネット検索、図書を利用する。 ・稲の成長の具合、病気の有無を観察する。 ・田んぼの様子を観察。 ・環境問題(農業、化学肥料使用等と環境との関係、田んぼの中の生物等)を田んぼに住む小動物との関連で考えさせる。
6月	○米作りーアイガモ除草 ・アイガモの確保 ・育てる(2週間) ・アイガモネット張り (外部講師 アイガモ農家) ・放鳥 ・管理 ○米作りー除草 ・田んぼの中の生物観察 ・除草(1回目)	
7月	○米作りー除草、水の管理	

8月	<ul style="list-style-type: none"> ○米作りーゆっつお作り ○米作りー稲刈り <ul style="list-style-type: none"> ・刈り取りの日の決定 ・用具の準備、関係者との打ち合わせ ・鎌で刈る場所、機械で刈る場所を決め、作業を開始する 	<ul style="list-style-type: none"> ・稲を束ねる「ゆっつお」を地域の方の指導で行う。わらの用意、地域の方へのお願いは担当者で行う（指導者と一緒に給食をとる）。 ・稲の状況を観察し、協力者と相談し、刈り取り日を決定させる。 ・担当者の話し合いで（協力者の助言を生かし）日程、方法を決め、手刈り手順を全員に提案する。 ・担当者のみから説明、指示が出るようにする。
9月	<ul style="list-style-type: none"> ○米作りー乾燥、粳すり 	<ul style="list-style-type: none"> ・乾燥機への移動、粳すりに、米作り班が参加する。玄米を袋に入れ、閉じる。
10月	<ul style="list-style-type: none"> ○米作りー精米 ○米作りー販売 <ul style="list-style-type: none"> ・収穫量の把握 ・今までにかかった費用計算 ・市場調査（インターネット、地域からの情報分析） ・販売価格と販売方法を決める ・広報（チラシ、インターネット発信） ・販売 <ul style="list-style-type: none"> なめがたあきんど祭り 地域の方に販売 PTA に販売 ・集計 ○米作りー餅つき大会 	<ul style="list-style-type: none"> ・収穫量を把握する。コシヒカリとマンゲツモチの販売を計画する。会計担当者が中心となり、販売方法、販売価格、場所等を調査し、話し合いを進め、決定するよう勧める。 ・ホームページ作りなどパソコン操作を指導する。 ・PTA や外部の方々と担当者が直接交渉する機会を豊富に設け、社会との接触を進める【自ら考え判断する場の設定】。 ・他の販売者と比較することで、学び、自分たちの販売に生かす。 ・金銭の管理に留意する。
11月～ 2月	<ul style="list-style-type: none"> ○謝礼 お世話になった方々に謝礼 ○収支決算報告 <ul style="list-style-type: none"> ・収入・支出計算 ・事業の報告 ・収益の活用について検討 ・全員に提案 	<ul style="list-style-type: none"> ・餅つき大会では、あんこ餅を担当する。アズキから餡を作り、餅をつき、あんこ餅を完成させる。 ・農業経営で行った様々な体験を振り返り、世話になった方々に感謝する。お礼に、収穫した米を贈る。 ・立替金、支払いを行い、収支決算する。 ・収益の活用について検討し、全員に提案し、活用を決定する。

(資料2) 写真資料

- 田んぼとの対面 5年生8名（後に1名転校して7名）、裸足で田んぼに入ったことのある児童は一人もいなかった。



- 芽出しの機械に種籾を入れ、一定の水温を保って芽出しを進める。右の写真は、種まき時の種の様子。



- 電動ドライバーを使って木材を組み立て、ビニルを張り、プール式の苗代を作る。種をまいた育苗箱を並べて保温用にビニルをかぶせる。直接日が当たらないように寒冷紗を使用。



- 育苗。芽が伸びていく。登下校時には、みんな覗いていく。全校児童で苗の観察会。灌水、雨の後はビニルにたまった水の除去。



- 起耕した田んぼに水を入れ、耕耘機を使って代掻き。すぐに機械操作にも慣れ、徐々に田んぼが平らになっていく。田植機を使って田植え。機械で植えても稲の列は曲がってしまう。



- 差し苗。植え残しや倒れている箇所にも苗を手で植え直す。



- アイガモ農法 近隣のアイガモ農家に教えてもらいながら、アイガモネットを張る。アイガモを注文、購入する。先生に立替ってもらったお金を郵便局から送金する。2週間ほど教室で飼い慣らし、田んぼに放す。勢いよく、草を食べ始める。不思議なことに稲は食べない。



- 中干し、実る時期を迎え、アイガモネットの取り外し、作り上げた「ゆっつお」1,500本。



- 1枚分を手刈りする。半日かけて刈り終える。途中、近所の方からの差し入れを頼張る。
手刈りの稲束はコンバインで脱穀。協力してくれる農家で、乾燥、粳すりを行い、教室に運ぶ。コシヒカリ 330kg、マンゲツモチ 280kg



- 白米で販売することになり、全て精米する。協力してくれた農家の精米機を使わせてもらう。糠は米を買ってくれた人に景品としてあげることにした（農家の人のアドバイスあり）。



- マンゲツモチ 60kg を PTA で買い上げてもらい、親子餅つき大会を実施。5年生も米とぎやきな粉作り、あんこ作りに協力する。



- 間違いないように計量し、米袋に入れる。米の名前は、「う米」。市場調査、経費、無農薬という付加価値を考え、価格を決定する。父母、先生方のアドバイスも取り入れる。実際の売り場を想定し、リハーサルを繰り返す。



- 大きな声を出して呼び込む。試食、景品（梅干し、糠）を付ける等の工夫をし、2日間で完売。米を買って貰えたという喜びは大きかった。売り上げ185,000円。隣の店から商品の並べ方を教えてもらったり、差し入れを戴いた。たくさんのお客さんと会話できたことも大きな収穫だった。2日目は声が嗄れていた。



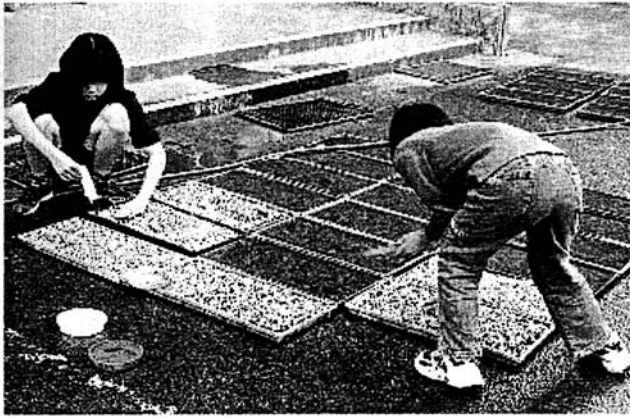
- 土地代は現物で支払うことになった。地主さんはかなりサービスしてくれた。世話になった地域の人にも、米でお礼をした。



稲作りから販売まで

今年も5年生

行方小 児童が本格農業体験



丁寧に育苗箱を作る五年生の児童たち＝行方市立行方小

行方市行方の行方小（橋本美江校長、児童七十五人）で、ユニークで本格的な農業経営体験学習が行われている。五年生全児童で会社形態の組織を作り、種まき、育苗、水管理、販売など一連の米作りを実践する。「思っていたより大変だし実感できた」と児童らは、教科書にはない、貴重な経験を積んでいる。

会社組織で経営実践

この体験学習が始まっらおうと提案した。「作」とした資本金ゼロ円の組織を作り、土地を借りるところから始まり、学校で育てた苗を近隣の約十坪の水田で田植えした。水の管理も児童自らポンプで水をくみ上げ、雑草取りにも励みながら、無農薬栽培で育て上げた。昨年は、五年生十五人が参加。現在六年生で、「元社長」の川尻幸拓君（二）、「元部長」の磯山雄希君（二）は、一年がかりの共同作業を振り返り、「最初は遊んでいる人もいたけど、仕事をするうちに責任感が出て、

米袋代などを除いた約十五万円が収益となり、募金やスキー学習の費用に充てた。先輩の奮闘ぶりを見た後輩たちも、本年度の米作りをスタートさせた。四月二十四日には、五年生全児童で校舎脇に幅約一坪、長さ約十五坪の木枠を作り、種を蒔いた育苗箱を設置。ススキなどが食べないようにビニールをかぶせた。「社長」の根本光君（二）は、「種がうまく散らせず、重なって大変だった」と、早くも難しさを実感。「部長」の高野志穂さん（二）、「副部長」の高野翔夏さん（二）は、「今年は八人と人数が少なくて大変だけれど、みんなで協力したい」と声をそろえた。田植えは五月中旬ごろの予定。今年は雑草取りの負担を減らすため、アマガモ農法にも挑戦。九月下旬の収穫を目指している。県教委義務教育課によると、県内の小学校では計三百七十九校が農業体験学習を行っているが、「種まきから行うのは珍しい」（同課）という。橋本校長は「地元の人たちが見守っているのも大きい」と地域の協力に感謝し、「条件がかなえば、今後も続けたい」と話した。（藤田祐一）

学び最前線



終始笑い声が絶えない子どもたち＝行方市行方で

行方市立行方小学校

教育

「社員」務め農業経営体験

「こんにちは」。行方市立行方小学校(橋本美江校長)の裏の水田に大きな声を響かせて、小さな「社員」たちが次々に駆け下りてきた。同小では、5年生が疑似会社をつくり、育苗から販売まで本格的な農業経営を体験する。会社の名前は「行方ガキンチョお米社」。5年生は全員で7人。児童はあつという間に裸足になると、水田に入っていた。

農家から借りている水田は約20畝。社長、米部長、会計などの役職には、児童が立候補。会社経営は、秋に収穫する米を借り賃として、水田を借りるところから始まる。総合的な学習や社会科、放課後などの空いた時間を利用して活動する。

社員たちは毎朝、天候や電気が気持いいよ。一方で、草取りをしていた社長(君10)が「入る動かしが難しい。頼みなくて、つい自分でやっちゃった」と組織運営の難しさをほつとみんなに仕事を頼んでくれたらいいの」と声がかかった。


1学期が終わる頃には、稲の成長によって自分たち作業の見通しもたてられるようになる。「小遣いではなく、労働の対価としてお金を得ることを学んで欲しい」(山本教頭)との狙いもあり、児童たちはスパーなどの折り込みチラシを集め、電気代や耕運機を借りた費用などを考えながら、周辺の相場から「無農薬、有機栽培」の米の売り出し価格を決めていく。

山本教頭は「教科書の勉強だけでは引き出せない子どもの力を引き出したい。子どもたちは思った以上の力を発揮する」と話す。

(中村真理)

(資料5) 農業委員会だより 第5号 (2007年12月発行)

行方小学校で本格農業体験
NGKK (行方ガキンチョ米会社)



行方小学校(麻生地区)では、一昨年より5年生を対象に本格的な農業体験学習を行っています。

今年、稲作りから販売までを体験した5年生は全員で7名。週3時間ある総合的学習の時間をフル活用し、会社形態の組織を作って、社長・部長・副部長を中心に種まきから育苗、水の管理など、米作りの先輩6年生の助けを受けながら、丁寧に一連の作業を実践してきました。今年は雑草取りの負担を減らすためにアイガモ農法にも挑戦。苦勞して育ててきたおかげで無農薬栽培の美味しいコシヒカリ5俵半とマンゲツモチ4俵半、さらにサツマイモを収穫することができました。

これらは、11月3日から4日に麻生運動広場で開催された「第1回なめがたあきんど祭」で販売。子どもたちは会場に訪れたみなさんに自慢の米を味わってもらおうと、試食用のおにぎりを用意し、朝早くから大きな声で呼びかけを行いました。

「う米(うまい)」と名付けられたコシヒカリは子どもたちの努力で完売。売り上げた大切な収益についても、今後、子どもたちが自主的に話し合い、使い道を決めることになっています。

7名と少ない人数でしたが、みんなが協力し合いながら教科書にはない貴重な体験ができました。



▲たくさんのお客さんで賑わいました

つながる 広がる 食農教育

小学生が作る会社

前行方市立行方小学校
山本 良信



保護者が寄付してくれた田舎の田舎で、子供たちが稲作体験をしました。稲作体験は、子供たちが稲作体験を通して、食農教育の大切さを学びました。



11月3、4日に稲作体験をしました。子供たちは稲作体験を通して、食農教育の大切さを学びました。

稲の世話と収穫

朝、田んぼの水の状態を見て、足りないときは、ポンプのスイッチを入れる。除草はアイガモで間に合わず去年の経験者、六年生の手を借りて作業した。稲穂が出るまで、根気の必要な辛い作業が続いた。

九月下旬に収穫。三分の二をコンバインに頼り、残りを手刈りにする。重役会議はそんな決定をした。担任と助っ人を含めた一〇人が一ががが

りて刈り取った。近所の人たちの揚げ餅の差し入れに子供たちは大喜びであった。地域の応援は会社を奮起させていたよ。

さあ、販売!

スーパーのチラシ、JAの情報、インターネットで市場調査を進めた会計部長は、出納簿と突き合わせながら、価格を決定した。コシヒカリとマンゲツモチが混じらないように注意しながら、体重計を教室に持ち込み、五塚一〇郎入りの米袋を作った。「う米」と銘打った、会社のオリジナル商品である。

農家の集まる地域の農業祭(行方あきんど祭)で米を売るには、人目を引く看板製作、試食用を用意するなど、大変な努力が必要だった。学んだことは「販売は粘ること」。

どうにか、二日間で完了した時には声があがっていた。たくさんのおまけの言葉を受け、やり遂げた喜びで一杯だった。

る、電動ドリルでポール式の前代を作る等々、子供の脳を刺激する初めての作業が連続する。

指示されて動く「活動」から、「自ら考え判断し、行動する」段階になると、重役会議を開き、作業手順や仕事内容を決める。

調べ学習を重ね、先を見通せるようになった米づくり部長は、代かき、田植え、水管理や除草の一連の作業について社員に指示が出るようになる。が、五年生の試行錯誤は始まったばかり。

無農業者が高額で売れることが分かった。除草剤を使わないで、草取りの手間も省け、肥料も減りできる一石三鳥のアイガモ農法に取って進むことを重役会議で決めた。近くの農家による四メネットの提供と指導で、アイガモ農法を始めたが、種代は大きな出費になった。重ねて七月月にカモに運走されてしまったのは大きな痛手であった。

予想外、これも字習のうら。

稲作体験は、子供たちが稲作体験を通して、食農教育の大切さを学びました。

稲作体験は、子供たちが稲作体験を通して、食農教育の大切さを学びました。

稲作体験は、子供たちが稲作体験を通して、食農教育の大切さを学びました。

稲作体験は、子供たちが稲作体験を通して、食農教育の大切さを学びました。

おもしろ ビックリ 農業体験

(行方小学校での米づくりは一生忘れられない思い出になりました。)

総合的な学習の時間で行った米づくりを「すごいことをやったな」と思いました。始めから最後までほとんど自分たちの力でやり、地域の人たちと触れ合い、芽出しから販売まで苦労したとや大変だったこと、困った事もたくさんありました。時には「面倒くさい」「もういやだ」と思ったこともありました。

地域の方が「頑張っているね」「七人で行っているの?すごいね」とか、低学年の子にも「お米作っているの?おいしくなるといいね」とか、お米の大切さを学びました。



ね!」と言ってくる人たちがいたので「頑張らなきゃ」と思いました。私たちは、このような応援があったからこそ最後までやり遂げることができたのだと思います。

「米づくり」をしてとても良い経験をしたなと思いました。

会社組織で米づくりをして、それを出し、収益は話し合いをした結果、自分たちの給料、学校への寄付、教材費にあることになりました。私は皆の役に立てて良かったなと思いました。各学年にプレゼントを渡した時、皆が喜んでくれる顔を見て、思わず私も笑顔になりました。このような経験はもう二度とできないなと思いました。今思った気持ち、この体験をして、農家の人やお金を稼ぐ大変さを知りました。稲作体験は六年生になったときの足しなどやお給料にしました。お給料は一〇〇〇円で、はくは今でも使えないです。はくは、米づくりの活動をしてお金の大切さを学びました。

お金の大切さを知った

四年生の頃、五年生が米づくりをやっていたのを知って、たけれど、簡単だと思いました。

実際に経験して、「力不足が必要だ」と知りました。また、物の販売は粘ることなだと思いました。今年の米づくりは、一生の中でも思い出になりました。

この体験をして、農家の人やお金を稼ぐ大変さを知りました。稲作体験は六年生になったときの足しなどやお給料にしました。お給料は一〇〇〇円で、はくは今でも使えないです。はくは、米づくりの活動をしてお金の大切さを学びました。